

第5回地域包括ケア応援セミナーに参加して～これからの福祉経営と専門職養成～

昭和女子大学 北本佳子

地域包括ケアシステムの構築が求められています。そのシステムの構築を通して目指しているだれもが住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けていけるようにするためには、身近な市町村で提供される「地域密着型サービス」の推進・整備が要の一つとなると言えます。ただ、「地域密着型サービス」の経営は難しい(採算が取れない)と言われることもあり、なかなか進展が見られにくい状況のようです。しかし、今回のセミナーでは、経営戦略をもつことで十分経営ができるということ、特に従来の施設のような「箱物サービス」ではサービス提供の総量が決まってしまうことから解決策が見出せにくかった職員の待遇改善を実現する可能性を持っているという指摘もありました。さらに、そのサービスは、住民が最も望んでいる「自分が介護が必要になったときに、家族に依存しないでサービスを受けながら自宅で住み続ける」ということや、「家族が介護が必要になったときに、自宅で家族の介護と外部の介護サービスを組み合わせて介護を受けたい」ということを実現するうえでは不可欠なサービスだということです。

見方を変えれば、今までの施設のサービスでは、サービスに利用者を合わせていた部分が大きかったと言えますが、地域密着型サービスではサービスの方が利用者の生活に寄り添っていくことになり、従来以上に利用者が「自分らしく」生活ができる支援の提供が可能になるということでした。また、そうした支援ができることは、福祉の仕事に就く職員の働き甲斐にもつながり、仕事の魅力もアップすると言えます。

さらに、この地域密着型サービスの展開の中では、住民の方にサービスの担い手になって頂くという視点をもつことで、支援する側の住民の方の自己実現にもなるほか、支援者と支援を受ける方の関係形成にはじまり、そこから支援者同士の連携や支援をする住民と専門職との連携も必然的に行われるようになっていくと言えます。また、地域密着型のサービスでは、地域のひとつのニーズに対応していくことが、同じ地域にある同様のニーズへの対応や、新しい社会資源の開発やネットワークの形成へと展開し、それが「まちづくり」にもつながっていく可能性を秘めていることがわかりました。そこには、事業経営(ビジネス)を超えた地域貢献としてとらえられる部分も含まれることから、それによってその事業者は地域にますます必要とされていくという展開(サイクル)も見えました。

このように書きますと、すべてがよいこと尽くめで、本当にそんなにうまくいくのかとを感じる部分もあると思います。確かに、今はまだ都市部では地域密着型サービスが未開発のところが多いため、参入がしやすく、需要もあるかもしれませんが、その後はどれだけ地域に寄り添い地域のニーズに対応していけるかが問われていくと言えます。また、地方では、都市部以上ニーズの点在や人材確保の問題もあることから、当初から地域住民と連携・協力をして、事業者(専門職)と住民によるまちづくりという視点をもったサービス展

開ができるか否かが問われることになると考えられます。

以上のことをまとめてみますと、最終的には上記のようなサービス展開、つまりまちづくりを視野に入れたサービス展開を可能としていく人材がいるかどうかがキーポイントとなるといえます。

福祉の専門職（社会福祉士等）の養成に関して言えば、現状では地域福祉やコミュニティソーシャルワークに関する知識や実践等に関する教育は行われていると言えますが、十分な実践力を身につけられる内容までには至っていないのではないのでしょうか。また、実習先も施設が多く、内容もやはり施設内でのサービス提供にかかわることが中心になっており、地域のニーズに対応する養成教育が十分に行われているとは言えない状況ではないのでしょうか。

今後は、上記の地域での生活を基盤とした支援を中心に据えた教育内容に関する検討を福祉の専門職はもちろんのこと、医療や保健、薬学、栄養など、多様な専門職の養成において検討し、実現していくことが不可欠であると感じました。また、そうした中で、マネジメント（経営）のセンスや力量が経営者はもちろんのこと、専門職にも求められてくると言えますが、福祉の専門職においては、それと合わせて利用者の権利擁護を基本とするという視点は忘れてはいけません。

十分に先が見えない部分もありますが、地域密着型サービスと地域包括ケアシステムは、今までの専門職養成に新しい魅力を付加するものになるように思います。専門職主導でなく、住民の方とともに、実際にまちをつくっていく時代が訪れてきているようです。それは専門職が今まで以上にパートナーとして地域住民の方に必要とされるようになるということではないのでしょうか。専門職養成にかかわる者として、その期待に応えていきたいと思えます。